

＜講演抄録＞顎関節症における疼痛をどう捉えるか(第38回東北大学歯学会講演抄録)(最新研究紹介)

著者	千葉 雅俊
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	20
号	1
ページ	52-52
発行年	2001-06
URL	http://hdl.handle.net/10097/31760

附属病院第二口腔外科を受診し、入院加療が行われた悪性腫瘍症例のうち手術を施行した扁平上皮癌1次症例88例の手術法について検討を行った。

手術法は、切除して縫縮、または切除部位に対してテルダーミス®等の人工物による補填術を施行した症例が23例、切除した部位に対して腹部全層皮膚植皮術を施行した症例が21例、皮弁による即時再建術を施行した症例が44例であった。皮弁による即時再建術の方法は、局所皮弁6例、有茎皮弁4例、血管柄付き遊離皮弁34例であった。有茎皮弁当の内訳は、D-P皮弁3例、PMMC皮弁1例であった。また、血管柄付き遊離

皮弁は、前腕皮弁20例、鼠径皮弁9例、腹直筋皮弁5例であった。同時に下顎骨区域切除術を行った症例に対しては再建用チタンプレートを併用した。

まとめ

手術を行う際には、患者がより早期に社会復帰が出来るように、機能的や審美的の回復を行うことは重要だが、術前に十分な問診を行い、動脈硬化、糖尿病などの合併症がないか、長時間の手術に耐えられるかどうかなど、患者の全身状態を把握したうえで、症例に適した手術法を選択することが重要であると思われる。

—— 最新研究紹介 ——

顎関節症における疼痛をどう捉えるか

東北大学大学院歯学研究科顎顔面口腔外科学講座顎外科咬合形成学分野 千葉雅俊

顎関節症の疼痛は咀嚼筋や顎関節に由来する。近年、MR画像、関節鏡および関節液の解析などによって顎関節の病態の解明は飛躍的に進んだが、筋痛については有効な検査法がないこともあって未だ理解されていない点が多い。日本顎関節学会の顎関節症の診断基準によると「咀嚼筋障害」は、画像診断で骨変形や関節円板の障害が確認された症例を除外して診断している。したがって筋痛が主体の顎関節症であっても関節円板が転位している場合、関節円板障害に分類されてしまう。しかし、古典的な「疼痛の悪循環」に見られる様に筋緊張は、交感神経と共に疼痛疾患において重要な役割を果たしている。そこで本発表では、これまで歯科領域では論じられることが少なかった筋痛が発生する一般的なメカニズムについて解説し、我々が行っている顎関節症の疼痛管理について紹介した。

【筋痛の発生機序】筋緊張が持続・亢進すると筋の血流が低下して、本来は疼痛閾値が比較的高い筋に疼痛を生じる。すなわち、1) 虚血筋は、収縮に必要なエネルギーを嫌気性解糖によるATP産生に依存している。その結果、局所に乳酸が蓄積してアシドーシスとなり、発痛物質（ブラジキニン等）が生成されて侵害受容器を刺激する。2) この刺激はA δ やC線維によって脊髄に達し上位中枢に疼痛を伝えと同時に、 α -および γ -運動ニューロンを活性化して筋緊張をさらに亢進させるという悪循環を形成する。3) 筋に分布する侵害受容器は発痛物質によって過敏状態となり、筋収縮で強い疼痛を生じるようになる。また4) 不安

や抑うつは筋緊張を亢進させるだけでなく、下行性疼痛抑制を減弱して筋痛を増幅する。さらに5) 筋に慢性的な疼痛や「こり」を生じる筋・筋膜痛症候群では、トリガーポイントが認められ、関連痛を引き起こす。

【筋痛の治療法】筋痛の治療は、これらの病態（筋緊張、筋の虚血、発痛物質の生成・貯留、侵害受容器の痛覚過敏、不安など）を改善する目的で行われる。実際に我々が行っている、1) 認知行動療法、2) 超音波治療、3) 下顎牽引療法、4) NSAIDを始めとする薬物治療、5) トリガーポイント注射について一部症例を交えて紹介した。

【顎関節症に対する疼痛管理の基本姿勢】疼痛治療は対症療法に過ぎないとして軽視する傾向が医療従事者の中に根強くあることが以前より指摘されている。確かに急性疼痛においては、原因を除去することが疼痛をコントロールする上で有効な方法である。しかし、慢性的に疼痛が生じている疾患においては疼痛の原因の特定が困難なことが多いだけでなく、例えば当初の原因を除けても疼痛が消失しないことは少なくない。したがって患者を苦しめる疼痛は早急にコントロールする様に努める必要があり、そのことによって多くの顎関節症を緩解・治癒に導くことは十分可能である。逆に疼痛が遷延すると疼痛システム自体に問題が生じてしまい、顎関節症を悩ましい慢性疼痛に移行させてしまう可能性があることを考慮に入れる必要がある。

【結語】顎関節症の治療に際しては、筋痛を見逃さない様に注意深く診察すると共に、疼痛発生の機序を考慮しながら適切な治療法を選択・実施し、疼痛をできるだけ早くコントロールすることが大切であると考えられる。